

私の養鶏随想録

加藤 宏光

IBD と IBD ワクチンの情報

1970年代の初めには、IBDはその実態が明らかでない鶏病で、未知の産卵異常や育成期間の問題は《分からなければ取りあえずIBD》とされていた時代である。その時の調査目的の1つがIBDとそのワクチネーションについて実態を知ろうというものであった。

IBDの情報はアメリカでもまだ生産の現場にまで行き渡っているわけではなかった。ドン・ベルに連れられて参加したセミナーは同じカリフォルニア州立の鶏病診断センターに勤務するビックフォードという獣医官がIBDの発生事例を、顕微鏡所見を含めて生産者に解説するものであったから、当時はアメリカの採卵養鶏生産者もIBDの何たるかを知ろうと努めていたのである。

我々が訪ねたのは、ワシントン州シアトルの郊外にあるH&Nという鶏種の開発センターであった。そこには、野外を担当する獣医師が待ち受けていた。彼は我々3人のためだけに、スライドを駆使しながら《IBD》とはどんなものか、を解説してくれた。

その概要は――

1. IBDは親からの移行抗体を有する場合、育雛期の25～30日齢で発生するファブリキウス嚢を冒すウイルス性伝染病である
2. 症状としては緑色下痢便を排泄し、食欲不振を伴う極度な沈鬱を主な特徴とする。実質的な被害は一過的な減産率の増加で、おおよそ3～5%に上る

3. IBDワクチンは生ワクチンが市販されている
4. 生ワクチンは強毒タイプ、弱毒タイプがあり、前者は育成期間に1度(25日齢頃)、後者は2度飲水で投与する
5. 親にIBD経歴がない場合には、雛の感染時期は早まり0～1週齢で感染することが多い
6. 初期に感染すると生涯に渡る免疫阻害というダメージが残る

これらの情報はIBDワクチンがまだ市販されていない日本でも種々のルートで提供されていたため、それほど珍しいものではなかったが、H&Nの技術者は丁寧に解説していた。カリフォルニアでのIBDセミナー、ここにおける説明を聞くに当たって、アメリカでのIBD問題は軽微でなく、また生産者のIBDについての知識も十分でないのだからと想像される。

そうした未熟な環境で、すでに数種のIBD生ワクチンが市販されている実質的な対応こそ、特筆されるべきわが国との差異であろう。

帰国後、IBDの問題にはしばらく悩まされることになる。IBDのダメージは4週齢前後に発生する減産ばかりが注目されていたが、実際に大きな経済的な被害は移行抗体のない(親にIBD経歴が一切ない)初生雛が野外のIBDウイルスの侵襲を受けるケースである。

このような場合にはIBDウイルスは極めて若い時期(0～2～5日以内)に感染し、取り立てて目立つ症状もなしに野火のように群全体に広がる。

しかし、この際にIB(伝染性気管支炎)の感染を併発することが多い(実はこのIBについても臨床的には奇異に感じることがあるのではあるが…)

この時期に感染したIBはその時点で卵巣にある原始卵胞の数を大きく減殺してしまう。そのため、その後なんらの疾患感染歴がなくても、産卵ピークが80%程度で終わってしまうのである。このような極端な産卵障害を起こしている、その原因が初生時期であるために、原因不明の症例として処理されてしまっていた。

現在ではIBD履歴のない親群は考えられないため、このような事例も昔語りとなってしまった(後に改めて野外の一経験として取り上

げてみよう)。

サンフランシスコと
ゴールデンゲート・ブリッジ

一連の調査を終えて最終地点サンフランシスコに到着。ここは息抜きの場所としてE氏が設定してくれた。

宿泊もこれまでとは違って、ハイアット・リージェンシーである。当時は最新ホテルの1つで目を見張るような華麗な姿と感じた。今ではサンフランシスコのハイアット・リージェンシーはいささか古びて説得力がなくなっている(一昨年であったか、同じハイアット・リージェンシーに宿泊したが、メンテナンスが悪いうえ、設備も更新されていないため、風評と異なるアメリカ経済の底の傷みを感じた)。日本の国際ホテルのレベルは欧米に比較して勝るとも劣ることはない。

1ドルが250円もした当時、高級ホテルに泊まるといっても1室にエクストラベッドを入れて3人宿泊という儉約である。さて、誰がエクストラベッドに寝るのか?

公平を期すればジャンケン。筆者は滅法ジャンケンに弱い。思った通り、エクストラベッドは筆者が引き当ててしまった。せっかくの高級ホテルもクッションも悪く狭い折りたたみベッドでは形無しである。

サンフランシスコで、これまでの緊張を解そうと、E氏はゴールデンゲート・ブリッジや有名なケーブルカー、港を案内してくれた。何より驚いたのは、午後9時近くでも外側は結構明るいことであった。もっとも、初めてのアメリカ旅行である。アメリカではサマータイム適用と聞かされていても実感は湧かない。

考えてみれば、サンフランシスコは東北ほどの緯度であり、しかもサマータイムでの9時は日本の8時。それなら、外が薄明るいのもうなずける。しかし、カルチャーショックで混乱した頭は十分にそれを理解していない。ただもう、明るい午後9時に驚いたものである。有名なケーブルカーも改めて目の当たりにすると、印象がことさらである。

ケーブルカーを乗り継ぎながら、港へ出る。ここは観光のメッカである。人混みが半端では

ない。ラッシュアワー並みの混雑を掻き分けながら、港通りをソブ歩く。

ここでまとめてお土産を買わなければならないが、何を買ってよいか分からない。選び切れずに、真鍮製の亀とアラビア風のデザインをしたランプを購入。妻には張り込んで(というより、当時筆者の辛うじて分かるブランド物、というべきか)、クリスチャンディオールの手バッグを買ったものであった。今思っても変な取り合わせである(ちなみに、帰国後に亀とランプを調べたら、何と《メード・イン・チャイナ》である)。アメリカ土産にメード・イン・チャイナとは、いやはや、とんだことであった。

帰国後に診療室を開設

弥次喜多のようなアメリカ珍道中を終えて、帰国後直ちに開業の準備である。当時、現場の検査とデータを作成・整理することで結構忙殺される日々が続いていた。鶏病検査だけでなく、体重経過や飼料概論から適性飼料摂取量の概算式を作るなどの思索をしていたため、農場を離れてラボを確保するのに十分な時間が取れなかったのである。

農場に住み込んで半年あまりの間に、住居を探すために4時間を使えたのみで、その時間制限の間に当たりを付けられたのは福島県郡山市域に限られた。駅前の不動産屋に飛び込み、適当なコンドミニアムとオフィス(らしきモノ)の紹介を頼んだ。駅前から5分で辿り着ける10階建ビルの最上階に3LDKの空き室があった。とりあえずこれを確保。さらに車で15分あまりの郊外地にある小さなモルタル塗りの2階建ビルの2階一室を紹介された。1階テナントにはラーメン屋が入っている。良いも悪いもない。とりあえずこれも確保。

さあ、あとは何とかなるさ!! このいい加減さ(フレキシビリティと言えは聞こえがいいか?)が、B型(血液型)の取り柄(筆者と性格の異なるB型の皆さん、ごめんなさい)。ここから一本立ちの正念場である。

(筆者: 株式会社ビービーキューシー代表取締役社長 / 農学博士・獣医師)